

庭野平和財団 16 年度助成活動報告書

コード番号 04-A-292

主題：東ティモール国バザルテテ地域住民組織型養鶏による農業開発と生活向上支援

特定非営利活動法人 地域国際活動研究センター

代表者 理事長 児玉克哉

担当者 事務局長 杉本正次

目次 (ページ)

I. 地域の概況	2
II. 活動の目的	4
III. 活動内容と方法	5
IV. 実施経過	6
V. 活動の成果	9
VI. 今後の課題	11

I. 地域の概況

この報告書は庭野平和財団の助成事業2年目のものであり、テーマ及び活動内容に大幅な変更はないため地域の概況や背景説明に昨年度と重複する部分があることを初めに断っておく。

1. 背景

(歴史的背景)

東ティモールは、もともと固有の言語・文化を持つ島であったが、400年に及ぶポルトガル統治と、その間、第二次世界大戦中の日本軍による3年半の占領を経て、1975年にポルトガルより独立をはたした。

しかし直後にインドネシア軍の介入侵略を受け、実質的な植民地状態に置かれた。以来24年間、インドネシア支配下で国民の四人に一人の命が失われるという悲劇的な事態となった。この間国連での決議や全島的なゲリラ武装闘争による反インドネシア闘争が行われた。それらの努力と国際社会の人権の高まりなどにより、1999年8月の住民投票によって独立を決定したが、直後インドネシア軍と独立反対派民兵の破壊行為によって生活の基盤がほとんど破壊されてしまった。

(社会、生活的背景)

東ティモール国は2002年5月に独立を果たしたが、前述の内戦により社会インフラ等が破壊されたままであり、ほとんど復興されていない。2004年度も対象地であるバザルテテ郡ファトマシ村に電気、水道の供給はなされていない。また、独立直後の状況として、インドネシア統治時代の24年にわたる植民地状態のため、社会的リーダー層となる人材が育っておらず、かつてのインドネシア支配者層・エンジニアの大量のインドネシア帰国により農村では栽培技術低下や収量の低迷が起こっている。

2. 現状と問題点

(1) 未整備な社会インフラと国連の撤退

首都はディリであるが、電気やガス、水道などの基礎的なインフラはまだ確立されておらず、ようやく電気の供給がディリで可能となったが、2005年2月現在、電力費用を住民では賄いきれないとの理由で夜間12時から朝5時までは停電している。住民の移動手段は徒歩、バイク、自動車である。公共交通機関は整備されておらず、個人営業によるタクシーやトラック、マイクロレットと呼ばれる乗り合いのミニバスが利用されている。しかし、2004年5月に日本の自衛隊が撤退し、国連暫定統治機構もその役割を終えて順次収束しており、いわゆる国連マネーがなくなる中で、実体経済が縮小していつている。

(2) 産業として未成熟な農業

主たる産業は農業であり、以前からコーヒーを代表的な換金作物として輸出している。しかしこれは一面の真実に過ぎない。

今回の現地調査で島の西から東まで平野部分、沿岸部分をまわったが、農業は行われているものの、産業としては成立しているとは言い難い。たとえば、アイナロ地方は水田稲作がおこなわれ、土地も平坦で面積も広く収穫量も多い。しかし、生産された米は他の地方に輸送されたり消費されたりしていない。その先のロスパロス地方ではタイ米やインドネシア米が商店で売られているのである。米の販売価格の問題ではなく、日本の農協のような組織がなく、流通や決済を行う方法などが行われていないためである。コーヒーについても、アメリカ資本による会社が生産者を回って生豆を収穫時に集めるだけであり、東ティモール人が集荷、換金などを行っているわけではない。

東ティモール人による会社組織や日本にあるような経営者団体は現在はないというのが現地ガイドの説明である。

農民は、自作農的形態が多く、自分で田畑を開墾したり、農地の一部で家畜を飼育したりしている。家畜は鶏、山羊、豚、牛などが見られる。ただし、現状では牧場のように管理された放牧をしたり、豚小屋、鶏小屋という家畜小屋を作って飼育したりしている農家はほとんど見られない。牛だけは地域によっては集団（10 数頭程度である）で管理している農家が見られる。

(4) ファトマシ村の概況と問題点

対象地であるリキサ県バザルテテ郡地域は首都ディリから西に自動車です約1時間30分程ほど走ると到着する。海岸沿いの道路は舗装され、スピードも上げる事ができる。しかし、海岸の幹線道路から分かれ、村に入ると車がやっと1台通るぐらいの狭い山道が続く。

バザルテテ郡は海岸部から山地までを含む9つの村から成り立っている。プロジェクト地はその中のファトマシ村である。

ファトマシ村はちょうどバザルテテ郡の中で地理的にも中間的な位置を占めていて、海岸でもなく、山頂というわけでもない。地理上も行政上もバザルテテ郡の中心地（警察署や郡庁がある）である。ファトマシ村ではとうもろこし、キャッサバなどを中心にその他の野菜も収穫されている。しかし、その収量はわずかである。米は水田がなく、植え付けされていない。

それらの大きな理由は、山地であるため畑や耕作地に平らな土地が少なく、収穫もしづらいことである。

ある村民の畑に案内されたが、「ここが畑です。」と言われても、私の目には単なる崖にしか見

えなかった。案内してくれた人は実際にその畑に収穫に下りて見せ、初めて私にもそこにトウモロコシ、キャッサバ、バナナなどが栽培してある事がわかった。その様な急峻な傾斜地で女性を含む村民が耕作しているのだった。また、肥料は一切施されていないようだった。鶏、山羊などの家畜は放し飼いで見られるものの、日常的には動物性たんぱく質はほとんど摂取されていない。

II. 活動の目的

1. タンパク質の不足を改善する

トウモロコシやキャッサバが中心となる食事により、タンパク質不足になり、栄養改善が必要な児童、住民が多く見られる。村長の説明による主食はトウモロコシを煮て、塩で味付けして食べるのが普通であるという。肉はどんなときでもご馳走であり、ふだんは食卓にのぼらない。また、トウモロコシなども年中採れるわけではないので、端境期の時などは1日に1食というときもあるという。栄養改善は急務である。玉子が村で取れることにより供給量が多くなればより手軽なタンパク源として消費されることが考えられる。もちろん、全てを玉子でまかなうというわけではない。

2. 現金収入への道

一番身近なニワトリは1家に2-3羽が放し飼いで飼育されているだけで鶏舎を使った養鶏は見られない。鶏舎を使った平飼いで養鶏を普及させ、現金収入を見込む。玉子を食べる習慣がないわけではなく、現在、供給されていないだけなので、供給が可能になれば需要は発生する。デイリの市場では玉子が売られている。村できちんと生産管理できるならば、玉子の生産は継続的な収入となりうるし、販売先は得やすいといえよう。昨年立ち上がった養鶏グループでは玉子が収穫できており、村内で販売を始めている。(1個 15セント)ただし、まだ少量でありグループの人数(5人)に比べて全くの小額であるため利益や余剰と呼べるほどではない。

3. 有機農法への応用

現地では肥料を使った農法が普及していない。この村だけでなく、多くの地域で現在は肥料を使うことをしていない。収穫物はそのせいもあってほとんどが貧弱である。鶏糞を有機肥料として利用する事が可能になれば収穫物の増産につながる。

この点に関しては、以前のプロジェクト途中のニワトリの死亡事件や、そのため計画以下の収量からまだ実現されていない。鶏糞を収穫できるほどまだ継続してニワトリの飼育が行われていない実情である。また、日本と違い熱帯気候の中では鶏糞の分解が速く進むことも考えられ、こ

の点からもまだ観察が必要である。

このようにして養鶏による栄養改善と小額の現金収入の向上と有機農法への応用を主目的としてプロジェクトを計画、実施した。2年目に入ったというものの、諸設備や経験の不足などで、まだまだ助走期間という感があり、もう1-2年の蓄積が必要である。

4. 村おこし

- (1) この養鶏プロジェクトを「住民が経営に参加し自主的に工夫しながら生活改善を進める」機会とし、話し合い、決定し、行動するという自主活動を育てる場としても利用する。グループと村行政との連携を図っている。
- (2) 2年目として、養鶏技術を持つ人材育成を効果的にするために村の学校に協力してもらって生徒の教育活動に組み込もうと計画した。日本の学校で行われる委員会活動やクラブ活動のシステムである。

これらを短い言葉でまとめると活動目的は下記の3つになる。

- (1) 玉子の収穫による村民の栄養改善
- (2) 村民の小額現金収入の実現
- (3) 鶏糞等を有機肥料としての有機農業の検討
- (4) 村おこしの共同体づくり
 - 1 自主グループによる活性化
 - 2 教育機関を巻き込んだ人材育成

Ⅲ.活動内容と方法

今回事業の、中心的な活動内容は、「ファトマシ村の村民の参加による養鶏プロジェクトを継続し、換金事業、有機農業、人材育成への広がりを持つ」ことである。

その内容と方法を具体的に述べると以下のようなになる。

- (1) ファトマシ村関係者（村長、村民の希望者、聖心侍女修道院）と地域国際活動研究センターで会合を持ち、養鶏事業の進捗報告と今回の新規計画の策定をする。
- (2) 村民第1グループ（昨年のメンバーである）を中心に養鶏技術研修会を開催する。
- (3) 学校関係者と村の養鶏参加メンバーによる小屋の設置計画を話し合い決定する。
 図面の検討・材料等の見積もり・購入計画
- (4) 養鶏小屋の建設を行い、完成後ヒナを入れて飼育を始める。

IV. 実施経過

1. 概要

- (1) ファトマシ村関係者（村長、村民希望者、聖心侍女修道院）と地域国際活動研究センターとの連絡会合で計画の策定、実施の話し合いをすすめ、希望者を募った。
- (2) 昨年の第1グループの推薦も含め、村民から養鶏希望者グループを確定する。
- (3) グループが中心となり鶏舎の設計と材料の発注をおこなう。
- (4) 5月に鶏舎の建築を完成する。契約に従い現地のグループ、村民等の労力を提供する。
- (5) 養鶏を開始する。
- (6) 並行して、第1グループの養鶏事業の相談にのり、玉子の生産のサポートをする。

2. 実施経過表

実施項目とその日付	実施内容の説明
<p>2004年8月25日～9月3日東ティモール訪問 行政当局等との話し合い</p> <p>村長およびバザルテテ郡長と会見、今回の来村の目的や村の様子について意見交換をおこなう。</p>	<p>日本からファトマシ村にスタッフおよびボランティアが訪問した。(9日10泊)</p> <p>第1グループ養鶏プロジェクトの小屋の調査をする。以前より風通しが良くなり、鶏も落ち着いていた。現在は50羽の鶏飼育を行っている。鶏は地鶏を購入して飼育している。</p>
<p>8月27日 ワークショップ</p>  <p>籾殻燻炭ワークショップの様子</p>	 <p>養鶏小屋と第1グループで収穫された玉子</p> <p>村人と共同で、養鶏小屋において籾殻を床にまくことと、籾殻を使った燻炭作りを行う。燻炭づくりは器具を使ったが、今後村で普及させる目的である。</p>
<p>8月28日 植林用の土地調査、下見</p>  <p>8月31日整地が完了した学校敷地</p>	<p>予定した学校敷地ではなく、私立学校の好意で提供された植林や種まき畑用の土地を見る。小学校校舎横の土地を借用できるとのことである。調査の結果、平坦な土地で地味も良く、形状、日当たり共に良好な場所であることがわかった。学校の敷地を一部提供していただき、2日にわたって整地、植林作業を行う。(面積260㎡)</p> <p>公立学校は村のものとは言えず、村長の努力にかかわらず今回は委員会活動はできないことになる。</p>

8月31日 養鶏第2グループの募集



ファトマシ村中心部、正面は警察署

9月4日日本へ帰国

行政を含む関係者と養鶏計画の第2グループ参加希望者募集を話し合い合意する。(ファトマシ村村長ジョアンニ・リベイロ・ドス・サントス氏と修道院長シスター中村葉子氏が同席する)

出席者：杉本正次、伊藤幸慶他 (日本側)

10日間の滞在、調査を終え、日本に帰国する。

12月初旬～中旬

庭野平和財団の助成決定通知を受けて、ファトマシ村のなかで養鶏プロジェクト参加希望者を募る。

2004年1月22日(土)～2月5日(土)

日本からスタッフ、専門家が発発し東ティモールに滞在、帰国する。

新しく応募した村民グループが養鶏小屋のプロジェクトを行うことを、村長、修道院長などの審査を経て決定する。

新しい養鶏事業グループと面接し、決定する。




第1第2グループとの面接と意見交換会

第2グループ：ルイス・ドス・サントス(責任者)、ドミンゴス・ソアレス、ドミンゴス・ドス・サントス、アベル・リベイロ、ジョゼ・コレイアに決定。

5月15日養鶏小屋の建設作業開始

6月初旬 小屋の完成

養鶏小屋建築のための土地はリーダーの畑地と決定する。現在トゥモロコシの畑地となっているため、乾季が始まる収穫後の5月に建設することとする。

 <p>完成した養鶏小屋の外観</p>	<p>大工の指示の下、建設作業を進める。以前と比べ、平坦な土地であるなど工事は順調に行われた。</p> <p>養鶏小屋の建設作業を完成させる。(約2週間)</p>
<p>8月初旬 鶏のヒナの購入</p>	<p>ヒナを第1グループと異なり、オーストラリア産の白色レグホン系を導入したいとの意向が示された。理由は「大型で玉子が高く売れる。」とのこと。予想外だったが、第1グループとの比較もでき、今後はそういった知識や技術も必要と考えられるので了承する。</p> <p>この間の日本側との調整で時間がたち、8月にヒナを100羽入れることに決定する。</p>

V.活動の成果

バザルテテ郡ファトマシ村で取り組んできた養鶏事業の成果について述べる。

1. 村民の参加による養鶏事業の開始と成果

2004年8月より2005年8月までの期間がここでの報告内容である。

2年目を迎えて、養鶏事業と村との関係が少しずつわかってきた。日本では、500羽ぐらいの鶏を飼っているだけでは生活ができない。専業となるためには少なくとも2万羽以上が必要とされる。東ティモールがいくら生活費が安いからといって、100羽程度の養鶏だけではたべていけないということは予想していた。そのため、この事を話し、自分の収入よりも村のためにやってほしいと説明をしてもらっていた。実際に集まってくれた村人はそのことが理解できたかどうかはともかく、実質はボランティアに近い形で鶏が玉子を産み始めるまで努力していただいた。第1グループも実際に玉子が収穫できるまでに約1年を要しており、その間、グループで特別な収入

があったわけではない。養鶏小屋を建設するに当たっての期間、わずかな大工仕事の収入があっただけである。しかし、その間養鶏小屋そのものが、村のシンボリック的存在となり、第1グループはパイオニアとして村内外から注目された。現在、第1グループの小屋には50羽しかいないが、経験を積み100～150羽まで飼育を拡大することが可能である。今後の事業展開も重要であり、ちゃんと食べていける事業になるかどうかの見定めが今後必要である。日本からの継続的な協力を進めたい。

今回、第2グループを募集することや養鶏小屋の設計、建築等の準備は初回に比べると随分スムーズだった。実際に村の中に小屋が建った後と前とでは全然違うことを実感した。1棟目のグループは地鶏での養鶏を受け入れた。これは日本側からの条件でもあったし、この時は東ティモールとインドネシアなどの海外との交易も今ほど盛んではなかった。2棟目のグループはオーストラリア産の白色レグホン系を選択した。これはこのような選択が現実的に可能な程度に貿易が変化しているためである。

どちらにも共通して必要条件だったことは養鶏小屋を建てるというハードの部分だった。小屋があったがために、グループの協力が保たれたことは多くあったのではないかと思われる。鶏のヒナへの投資に比べると小屋を建てるということは、村人にとって高いハードルであったことは間違いなく、それを可能にした庭野平和財団の助成は村を動かす強い効果を持っていたといえる。

この事業も継続することによって養鶏の経験が増えるだけでなく、小屋の建築にかかわるノウハウや敷地選定、メンバーの作業量の分担など多くの学習効果をもたらしている。今後はヒナを育て産卵させていくことが中心になるが、ここでもヒナの管理だけでなく玉子の品質管理、換金事業のノウハウ、資金管理など多くの学習が積み重なるであろう事は予想される。

その意味では、玉子が村人に供給される（売買される）という波及効果ももちろんあるが、このようなノウハウの蓄積、そのような人材の育成といった効果も多大なものがある。ただし、これについてはまだ村民の中にもそれほど意識されていない。今後、養鶏から養豚など他の家畜に拡大するに当たって研修の役割と位置付けを村民により明確に訴えていく必要がある。

また、その意味から波及効果がわかるような取り組みができないかを検討中である。

以上のことから、この事業についてほぼ予定した活動が現地でおこなわれ、すぐには目に見えない部分も含めて大きな成果を挙げてきたといえる。

2. 村おこしの共同体づくり

養鶏小屋という目に見えるものがあることにより、このプロジェクトは村民の参加を得られや

すかった。前に述べたように、現実的には今まで、参加グループにとってボランティア的な要素が強く、事業というには今後の換金事業を経営しないと成果が得られたとはいいがたいかも知れない。

今回、継続して村にかかわることにより、村民との信頼関係も以前より進んだことを感じる。こちらも、小屋建設だけでなく、その後のトラブルもできるだけ相談に乗りたいという意思を持ち始めてきたし、村の側も、訪問の機会に子ども達との交流会を企画するなど、グループだけでなく村全体でかかわりを作り上げようというように変化してきている。そういった意味で文化交流的な側面も訪問時の交流に生れてきている。

しかし、この事を取り上げて村おこしができたと言うのはまだまだであろう。今後の課題に挙げるつもりであるが、村の伝統的な体制や住民間でのトラブルなどうかがい知れないことがほとんどである。

東ティモールは小さな村であってもインドネシア人(兵)、民兵、インドネシアとの併合推進派、そして独立推進派がお互いに戦い、コミュニティが傷つけられ破壊された過去を持っている。その傷跡は部外者には容易にうかがい知れない。それらに配慮しながら、今後も村おこしを進めていきたい。今までに行った事業がそのポジティブな面から村民に評価されていることから、この事業は村おこしの共同体づくりに一定の成果を与えたといえる。

VI. 今後の課題

1. 鶏の育成

養鶏事業はまだ取り掛かったところであり、2年目といいながら安定しているわけではなく、今後も注意深く進める必要がある。小屋や水の供給などの施設も改良できることは進めていく。養鶏技術の進歩を計り、安定した養鶏経営を進めていくために、学習や研修が必要である。地理的に近くにあるオイスカ農場にもグループは見学に行っている。社会的なインフラが整わない中では日本の養鶏技術も適応できないことが多い。現在の東ティモールに治安上の大きな騒乱はなく、社会が安定してきていることから、あらゆる機会を捉えて養鶏技術の向上を図っていく必要がある。

以前から言われていることであるが、東ティモールの家畜や鶏に時期的な病気の流行時期があるのか、そうでないかは慎重に見極める必要がある。2005年5月はそのようなことはなかった。むしろ鶏や村民の身の回りの衛生状態など予防できる環境をつくることが望ましいのではないだろうか。日本で常識となっている手を洗う、鶏舎に入る時に靴を消毒するなどの取り組みはできていない。

村民の栄養改善や有機農法への摘要は現時点ではまだ先の大きな目標である。

2. 村民の地域おこし活動の支援

今回、人材育成も含め、学校の教師と生徒による鶏小屋の建築、管理を提案してみた。日本にいるスタッフと現地に滞在している日本人修道院長との事前話し合いでは、「いいアイデアだ」という自己評価だった。実際に村長に相談したところ、いくつかの障害が発見された。大きな理由は村の範囲から学校が一定独立しており、校長と教員グループの意向は村長であっても干渉出来ないということである。学校の教員は公務員であり、村の自治権が及ばないと考えた方が良いという実態があるようだった。しかも、仮に校長が賛成しても保護者の賛成を得る必要があり、いわゆる PTA の組織があるので、こちらから話を持っていくにはいろいろな条件を越えなければならないということだった。

振り返れば、日本も同じような構造になっているので、その通りである。が、日本ではむしろ村の行政と公務員である校長や教員の方向性が似通っているため、協働できる事が多く、日本側の内部では今回そのようなことが予想されなかった。

今回は、この経験からプロジェクトの実施については現地で再協議をし、村長の勧めもあり前回の方法を踏襲した。この出来事を通し、村と言っても様々なアクターがあって構成されていることを再認識させられた。私たちも、もう一度村に着目し、村の中での行政機構や伝統的な男女関係などを理解しつつよりよく変化、推進させる方向でプロジェクトを進めようと考えている。